

■肢体不自由のある子どもたち・知的障害のある子どもたちへの実践事例

日常生活につながる読書活動の実践

横浜市立若葉台特別支援学校
司書教諭 関戸 優紀子

はじめに

本校は、2013年1月に横浜市緑区にいほろ新治町から移転し、横浜市立若葉台特別支援学校（通称名・横浜わかば学園）として開校しました。同年4月に、それまで30年の歴史ある肢体不自由教育部門（A部門）に加えて、知的障害教育部門高等部（B部門）を開設し、横浜市立では異なる障害種を設置する初の併置校となりました。

そのため本校では、その特徴を活かし、また、校内に併設しているコミュニティハウス、カフェを活用した教育活動を進めています。

例えばA部門中学部では、授業で育てたシソ、バジル、サツマイモなどをB部門が校内実習として行っているパン工房へ納品するコラボ授業を実施しています。パン工房のパンは本校併設のカフェや地元商店街等で販売され、地域の方々にご利用いただいています。

本校の学校教育目標「一人ひとりを大切にした教育を行い、地域とともに歩み、自立と社会参加を目指す教育を充実させます」とあるように、A・B

部門、それぞれの特性や児童・生徒の教育的ニーズに応じた学びを、保護者、若葉台地域、福祉・医療関係者、学校運営協議会などさまざまな関係機関と連携し、充実した学校生活を目指しています。

児童・生徒の読書活動面では、横浜市立の全校に配置されている学校司書が、本校でも担任と連携を図りながらA・B部門すべての児童・生徒の読書活動を支援しています。また、本校はB部門図書委員会による読み聞かせや朗読劇を通して、A部門との交流活動を深めた成果として、2020年度に「子供の読書活動優秀実践校・図書館」として文部科学大臣表彰を受賞しました。

今年度は、A部門小学部4～6年生での取り組みを紹介します。

活用事例

<小学部4～6年生>

【国語科】

本学級は、小学部4年生～6年生の複数学年で構成されています。国語科では、言葉をイメージしたり、言葉に

よるかかわりを受け止めたりする力を養い、日常生活における人とのかかわりの中で、自分の思いを伝えようとするができることを目標に学習に取り組んでいます。

単元『説明文に親しもう』では、説明文にふれる導入として『ぺったん！サンドイッチ』の絵本の読み聞かせを行いました。教室のテレビに「わいわい文庫」から『ぺったん！サンドイッチ』の映像を流すと、しっかりとテレビ画面を見る子どもたちの姿がありました。



教師がただ本を読むのではなく、マルチメディアDAISY図書を利用することで、話に耳を傾ける子どもたちの姿をじっくりと観察することができます。また、授業では、自作教材を使用して、絵本の通りにするとサンドイッチができるという体験を行いました。「わいわい文庫」をテレビ画面に映すことで、絵本の絵を簡単に拡大し子どもたちに提示することができました。

また、スピードを調整することで、教材をスムーズに手に持つことができ、不安な子どもも安心して取り組めることができました。自分で絵本に出てくるサンドイッチを作ることができたという満足感を得られている様子が見られました。



<小学4年生女子Aさん>

Aさんは内言語が豊かで、言葉の理解力も高く、イメージをもつことができます。課題は、自分の気持ちを周りの人に的確に伝えられるようになることです。発語数が乏しく、不明瞭であることから、まずは、手話の表現とともに言葉の学習を重ねました。

また、言葉の学習では、Aさんが体験的に習得できるようにしました。A

さんは好き嫌いもはっきりとしており、なじみのない絵本については落ち着いて読み聞かせに臨めないことも多くあります。

そこで、まずは「わいわい文庫」の本を読むことが好きになってほしいため、Aさんが大好きなおにぎりの絵本をチョイスしました。『おにぎり おむすび』では、軽快な口調で繰り返し「おにぎり おむすび なかみは なあに」というフレーズが出てきます。Aさんは教師の合図を頼りに、音声に合わせて手話で表現します。「おにぎり」「おむすび」「なあに」の「おにぎり・おむすび」については、国語科の『おむすびころりん』の劇でも自ら手話で表現しながら「おむすび」に近い言葉を使うことができました。「なあに」については、学校生活の中で教師がよくAさんに使う言葉で、例えば「何をしたいですか？」とたずねたり、Aさんから「せんせー。」と呼ばれたときに、「なあに？」と言ったりすることから、使う頻度が高くAさんの理解のつながりになりました。



『とんとんとん』は、主人公がたくさんのドアを叩いてドアが開いて物語が展開していくという絵本です。Aさんはマナーについても学習しています。閉まっているドアをAさんは「とんとんとん。」と言い、ノックしてから開けるようになりました。絵本の世界から体験的に日常生活につながった瞬間でした。



おわりに

本校の学校図書館は、学校司書のすばらしいアイデアと管理により、とても素敵なものとなっています。季節の装飾や、肢体不自由のある子どもたちにも使いやすい工夫もたくさんされていて、学校図書館が大好きという子どもたちが多くいます。しかし、自力移動ができない多くの子どもたちがタイムリーに図書室に行くことがむずかしい場面も多々あります。移動の観点だけでなく、体調によってもむずかしさがあることもあります。そんなときに、さまざまな姿勢や場所でも気軽に読むことができるiPadを使用した読書活動は有効な学習の一つになります。

本校では、ICT支援員の協力のもと、子どもたちのiPadで、のじぎくアプリから「わいわい文庫」を利用できるように整備もしていることで、どのような場面や体調でも子どもたちの読書活動ができるようになっています。

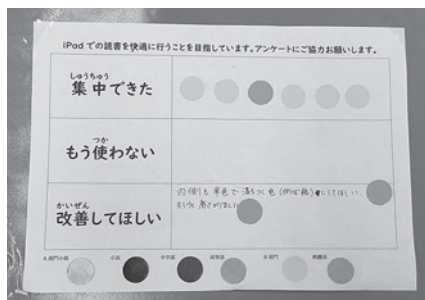


自分で考えて物事を動かしていく経験が、肢体不自由のある子どもたちは

乏しくなりがちです。「これを読みたい！」という気持ちや、「今、読みたい！」と人に伝えられる経験はキャリア教育の一つであると考えます。

読書は想像力が豊かになり、実体験につなげていくこと、もしくは実体験を思い出すこともできるので子どもたちの学習に必要なものです。一人で読むことが困難な子どもたちも、日常の中で当たり前のように、自分の好きな時間に読みたいタイミングで読書をすることができるようになったら本当に素晴らしいことと思います。

今年度は、図書室の机の上に簡易的なパーテーションを置き、そこで「わいわい文庫」での読書ができるようにしました。使用した児童・生徒、教職員へのアンケートからは、テレビにつなげて複数人での読書も良いですが、一人の空間で読書に没頭する時間が学校生活の楽しみになる子どもたちもいることがわかりました。アンケートの声を参考にさらに改善をしながら、大きな学校図書館の空間の中でも本の世界と向き合える環境づくりに取り組んでいきたいと思っています。



700冊を超える昔から親しまれているベストセラーから、マニアックなもの、タイムリーな話題のものなど、伊藤忠記念財団の工夫を感じます。今年度は特にオリジナルの『おにぎり おむすび』が子どもの心に刺さり、学習意欲が高まったり、日常生活に還元できたりしました。長年この事業を続け

ていただく中で、たくさんの意見を取り入れてくださり、本読みの音声にも変化を感じています。

これからも子どもたちの学習意欲や余暇の広がりのために、私自身も活用方法を工夫して、多くの子どもたちの読書活動の一助になるようにしたいと思います。

